

しんぶん 号外

2020年3月31日(火)

「アートしんぶん」
編集：アントニスきよみ（東京都立光明学園 病弱教育部門病院内訪問学級）、郷泰典（東京都現代美術館事業企画課 教育普及係）
デザイン：進士達
発行：2020年3月31日(火)
東京都現代美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒135-0022
東京都江東区三好4-1-1
東京都現代美術館
TEL.03-5245-4111（代表）
https://www.mot-art-museum.jp/
無断転載禁止

病室から現代美術の魅力を発信！

都内の病院に入院中の中学生と高校生が、オリィ研究所の分身ロボット OriHime(オリヒメ)や、ICT機器を活用しながら、昨年3月にリニューアルオープンした東京都現代美術館のMOTコレクション展「ただいま/はじめてまして」(2019年7月20日～10月20日)の作品を鑑賞した。

意外性の連続！ 今までみた事のない作品たち



アルナルド・ボモードロ
《太陽のサイロスコピー 1000年》
写真：木奥恵三

東京都現代美術館には、今までに見た事がない作品たちがある。美術の教科書に載っている絵画や彫刻とは異なった作品である。
人物や風景、動物などがモチーフになっていたり、ほこり取りを動かす装置が作品として置かれている。美術館の入口から140メートルの長い廊下を進んだ先にあるコレクション展展示室の入口からまず見えるのはアルナルド・ボモードロ氏の《太陽のサイロスコピー》という作品である。
大きさは約4メートルで、重さは5トン、素材は鉄とブロンズである。この作品は、太陽、宇宙、地球などをイメージして造られた。圧迫的な存在感がある作品だ。
「以前は外に設置されていて、もっともとゆっくり一日周回しているように設計されていた」と学芸員の郷泰典氏は語る。
今は止まっている作品だが、作品の存在感を実際に美術館に足を運んで見てみたい。見上げる程の大きさや重量感を生で味わうべき作品だと感じた。(かめちゃん)

知れば見方が変わる!? 衝撃的でおもしろいギャップ！



マーク・マンダース 《椅子の上の乾いた像》2011-15年
写真：木奥恵三

作者マーク・マンダース氏の《椅子の上の乾いた像》は、一見すると粘土や木材に見えるが、実はブロンズでできている。
その作品の周りには、ビニールが張ってあり、リフォームの現場のようなアトリエになっている。そのため、見た人はあたかも本物のアトリエと思ってしまう。
また、像の下には本物の粘土の破片が落ちていて、より見た目に干ばたかと思ってしまう。さらに像には乾燥したヒビ割れや体に刺さっている木の枝の切り落とした跡などが本物そっくり表現されている。

「ヒビ割れた様子からは、月日が経っているが本当はその状態をずっと維持している。この先もずっと変わらないという像である。」
高さ69センチ・幅170センチ・奥行68・6センチの像は、私たちと同じく人間の大きさの頭部や半身がギリシャ彫刻のように刻まれている。この作品は、想像とは違う作品で誰もか誤解してしまおうような衝撃的でおもしろいギャップがある。日が経つにつれて壊れていくかと思いつつ、何百年も今の状態を維持し続け、不思議な時の流れを感じさせてくれる作品だ。(かめちゃん)

色に圧倒される感覚を

今井俊介氏の作品は、色鮮やかでずっと眺めていたくなる絵だ。たぐさんのストラップの絵やドットをあつかっており、画面に迫力があり、くねくねしていたり、たぐさんの絵が重なりあっていたりして面白く、それをどうやって制作しているのかが気になる作品。
今井氏の制作過程は次の通りだ。

- 1 最初にストライプやドットをランダムにレイアウトした柄を作る。
- 2 ①の色をプリントアウトして、グニャグニャ曲げたりして写真を撮る。
- 3 写真を撮った四角をトリミングする。
- 4 できた画像をドットを揃かか色とり混ぜて描くものを決める。
- 5 ④でできたものからひとつを選んでキャンパスに写し取って色を塗る。
- 6 そして、色鮮やかな作品にした理由は、「このように色を使い始める前はもっと淡いパスという色を使うこと」。

テルトーンの色を使うことが多かったが、あるファストファッションで「でも鮮やかなフリースジャケットを販売して」おり、そのディスプレイを見て、「色に飲み込まれてしまうような感覚」に思ったという。そこで、「色に圧倒されるその感覚を絵で感じてもらいたい」と思ったという。ことだ。さらに今井氏は東京で暮らしている「街中の看板やネオンなんかをキリッとして、たぐさんの色に囲まれた生活」であることも作品の色が鮮やかになった理由だと思っているという。また、ある作品では、最終的に10枚以上の絵が重なって作られている絵もあるという。
ストライプのみならず、下部分がランダムに並んだ絵を描いてみた面白さで「うね」と今井氏は、「いつかチャレンジして絵にしてみたい」という今井氏の仕事もぜひ見てみたい。(あいちゃん)

動く作品に興味そそる

意外性のある空間で面白さに気づく



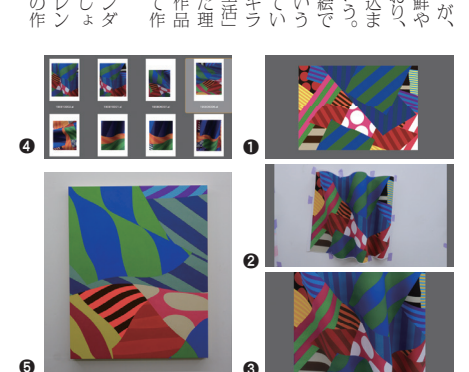
毛利悠子 《1/O》2011-16年 写真：柳場大

毛利悠子氏の《1/O》は、ロール紙に貼った展示室のほこりをセンサーが読み取り、電気信号を変えて、スピーカーやハタキなどが動くという、電球が光ったりする作品である。例えば、ハタキは床に2本おいてあり、犬がよごすたびに跳ね上がるように急に動いていく。また、2本の平行に並んだスピーカーが上下に動き、それともなひブラインドが開閉する。

他には、一巻のトイレットペーパーが天井から垂れ下がり、小さい水槽に2〜3週間でかけて沈んでいく。さらには、鉄琴を立てたようなペルリラからは、突然、

目覚まし時計のような大きな音が展示室に鳴り響く。これらは、人間がたいてい音を出したり、動かしたりするのはなく、ほこりが動かしているのだ。
今回の展示では、14メートル(幅)×12メートル(奥行)×6・5メートル(高さ)のサイエンス展示室に展示されたが、この展示の大きさは決まっておらず、展示室の広さに合わせて大きさが変わる。美術館といえは、絵ばかりが展示してあるイメージだが、動く作品は、とても興味をそそられる。美術に興味がない人も意外性のある空間で鑑賞すると、美術の面白さに気づくのではないだろうか。(ちゅぶちゃん)

ずっと眺めていたくなる絵



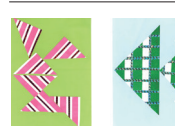
「小学部1年 題名「まち」」
自分の家は三階建てにして先生たちの家も作り、たくさん家が並んだ町になりました。サンタクローズがプレゼントを持って来られるように、屋根に煙突をつけました。
小学部3年 題名「おなか」」
何をやるか相談しながら作り出したピカピカ光るテープのところが気に入っていました。

トピック OriHime (オリヒメ)

オリィ研究所開発の分身ロボット。遠隔操作で手や頭を動かすことができ、音声による会話も可能。美術館での鑑賞活動では、ICT機器と併用して活用した。病室の生徒とコミュニケーションをとりながらの鑑賞は、リアルタイムに反応がうかがえ、まるで一緒に作品を鑑賞しているかのような臨場感が味わえた。(郷)



末永史尚氏の作品 Tangram Painting シリーズを鑑賞して、四角や三角の形を組み合わせて動物などを創りました。1年生はマスキングテープを使用しました。3年生はローラーで色塗りをした素材作りからしました。6年生はマスキングテープを色々な向きに貼り、色を付けた素材を使って制作しました。



小学部6年 題名「つり」
本人の感想「四角と三角だけで作るのがちょっと難しかったけど、なかなか上手できました。」

小学部1年 題名「まち」
自分の家は三階建てにして先生たちの家も作り、たくさん家が並んだ町になりました。サンタクローズがプレゼントを持って来られるように、屋根に煙突をつけました。

小学部3年 題名「おなか」
何をやるか相談しながら作り出したピカピカ光るテープのところが気に入っていました。

東京都現代美術館は、約7年間の改修を終り昨年2019年3月にリニューアルオープンした。休館は、アウトリーチを中心とした教育事業を展開した。特に距離的に困難な当館の来館が難しい多摩地域を中心に至急が出張授業、学校へ向かい「アート・ゲスト」一泊し訪問など、どの層にも開きやすく来館できるようにしたい。また、来館が難しい状況がこれまでも多い。幸い、休館中に病院内訪問学級の教員や不登校児童・生徒の復学支援施設と連携しながら、これらの場所へ出張授業など、これらへの場所と連携のチャンスを待たず、特に入院中の子ども達には、分身ロボットを活用し展示室や病室をつなぎリアルタイムに鑑賞活動を実施したり、展示作品を写真に撮ったものを後日ヘッドセットで鑑賞してもらうなど美術館と病室をつなげることを主としてこの開発の成果の一端でもある。▼大切なことは、美術館が「つなげる」ための、技術開発や「つなげる」ための、活動など、(かめちゃん)。

「アートの魅力発信」や「アート」という共通テーマで、病院内訪問学級の小学部から高等部までの子ども達が取り組んで来た。上がったのがこの新聞である。副題は「社会や仲間とながら新聞づくり」と、都内の複数の病院に入院している仲間には直接顔を見合わせる機会がなくても、新聞づくりを通して共同作業、一つのものを創り上げる喜びや仲間の存在を感じることを望んでいる▼また、作品の鑑賞活動や記事の作成段階で学芸員、研究所職員、作家の方々と間接的ではあるが関わりをもつことで、病室にいる社会をつなげる事ができた▼そして子ども達にとって現代美術は馴染みが薄かったが、その魅力の一端に触れる機会にもなった▼学芸員の方とのやり取りで得た情報を精査したり、悩みながら言葉を選んだりして、多くの方々に自分の思いや考えを発信することで、小さな病室から無限の広がりをと世界へのつながりが期待できる。(教員・アントニス)

編集の小窓

「アートの魅力発信」や「アート」という共通テーマで、病院内訪問学級の小学部から高等部までの子ども達が取り組んで来た。上がったのがこの新聞である。副題は「社会や仲間とながら新聞づくり」と、都内の複数の病院に入院している仲間には直接顔を見合わせる機会がなくても、新聞づくりを通して共同作業、一つのものを創り上げる喜びや仲間の存在を感じることを望んでいる▼また、作品の鑑賞活動や記事の作成段階で学芸員、研究所職員、作家の方々と間接的ではあるが関わりをもつことで、病室にいる社会をつなげる事ができた▼そして子ども達にとって現代美術は馴染みが薄かったが、その魅力の一端に触れる機会にもなった▼学芸員の方とのやり取りで得た情報を精査したり、悩みながら言葉を選んだりして、多くの方々に自分の思いや考えを発信することで、小さな病室から無限の広がりをと世界へのつながりが期待できる。(教員・アントニス)